HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第8章　サーミ・メディアの展開と現段階
Author(s)	小内, 純子
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 29, 146-162
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52407
Type	bulletin (article)
File Information	AN00075302_29_8.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第８章　サーミ・メディアの展開と現段階

小内　純子｜札幌学院大学社会情報学部教授

第１節　先住民メディアの役割と問題意識

第１項　オルタナティブ・メディアとしての先住民族メディア

主流メディアに対するオルタナティブ・メディアの重要性が言われて久しい。「もう１つのメディア」「代わりのメディア」を意味するオルタナティブ・メディアとは、「主流メディアが取り上げない情報を取り上げ、自分たちの表現・伝達手段として利用するメディア」のことである（小玉 1993）。こうした役割を担うメディアには、コミュニティ・メディア、市民メディア、エスニック・メディア、そして先住民族メディアなどがあり、それぞれは重なり合う部分をももちながら、オルタナティブ・メディアの一翼を担っている。

2008年９月25日、ＥＵの欧州議会は「欧州におけるコミュニティ・メディアに関する欧州議会決議」を採択し、その社会的重要性を認め、法的に位置づけて公的支援制度を確立することの必要性を明記した。そこでは、コミュニティ・メディアとは、「非商業的で政府から独立し、社会への貢献を目的とし、市民が主体的に運営しているメディア」と定義されている（松浦・川島 2010）。また、市民メディアは、全国市民メディア協議会の定義によると、「マスメディアに対して、一般市民や住民が自発的に取材や記事執筆を行い、手作りする参加型のメディアの総称」[1]とされる。したがって、コミュニティ・メディアと市民メディアの担い手には、主流メディアには容易にアクセスできないすべての人が想定されていることがわかる。

これに対して、エスニック・メディアとは、「当該国家内に居住するエスニック・マイノリティの人びとによってそのエスニシティゆえに用いられる、出版・放送・インターネット等の情報媒体である」（白水 2004:23）と定義されるように、主要な担い手は、エスニック・マイノリティの人に限定される。先住民族メディアは、このエスニック・メディアに含めて考えられることが一般的であったが、近年、両者の違いを意識する必要性が主張されてきている。たとえば、八幡（2005）は、歴史的背景やその帰結として今日的諸課題の性質が大きく異なる先住民族は、移民らとは明確に区分して論じるべきであるとし、「先住民族により、先住民族を主たる視聴者として運営されるメディア」を先住民族メディアとして積極的に位置づけた[2]。たしかに、近代国家成立の過程において、同化・統合され、その過程で文化、言語、土地などを失ってきた先住民族が自らのメディアを所有することは、移民の人びとがホスト国内でエスニック・メディアを所有することとは異なる意味を有していると考えるべきである。したがって、本稿でも、サーミ・メディアを先住民族メディアとして位置づけて考察していく。

第２項　先住民族メディアを所有することの意義

先住民族が自ら運営するメディアをもつことの意義はどのような点にあるのであろうか。エスニック・メディア研究において白水（1996）は、エスニック・メディアの社会的機能として、①集団内的機能、②集団間的機能、③社会的安定機能の３つをあげている。伊藤・八幡（2004）は、これを批判的に検討し、先住民族メディアの社会的機能を、①対内的機能、②対外的機能、③エンパワメント機能の３つにまとめている。対内的機能とは、先住民族個人の意識・行動変化ならびにその帰結としてのコミュニティレベルでの行動変化への作用の機能、対外的機能とは、コミュニティ活性化の帰結としての対外的情報発信の機能、エンパワメント機能とは、対内的機能と対外的機能の十分な充足を前提とし、最終的に主流社会における社会構造変化をもたらす機能を指している。

いずれにせよ先住民族自らが運営するメディアをもつことは、先住民族内部においても、先住民族と外部社会との関係においても大きな意味をもつことは間違いない。内部的には、民族としてのアイデンティティを確立し、民族としての誇りと自覚を芽生えさせ、民族としての共同行動を促すような力をもちうる。また、外部的には、主流社会からは「みえない存在」であった先住民族の存在を可視化するという効果がある。たとえ主流メディアが先住民族について取り上げていたとしても、それはつねに主流社会の視点で語られることを意味しており、先住民族に対するステレオタイプのイメージが流布され、「ゆがめられた像」を定着させる方向に作用してきた。したがって、自らが担うメディアを所有することで先住民族の視点から情報を発信することは大きな意味を有している。

以上のような先住民族メディアの社会的機能は、より大きな視点に立てば、「公共性」「公共圏」の形成と深く関わる。伊藤（2010）は、神戸市長田区にあるコミュニティＦＭ局「ＦＭわぃわぃ」を事例とし、多文化状況が進展するなかでのメディアの役割について指摘し、「メディアと公共性」について論じている。周知のように「ＦＭわぃわぃ」は、1995年１月17日に発生した阪神淡路大震災を契機に、長田区で開局した多言語放送を行うラジオ局で、現在は、韓国・朝鮮語、ベトナム語、タガログ語など10の言語で放送している[3)]。伊藤は、「多文化社会におけるメディアの『公共性』は、マジョリティたる日本人のみを対象にしてきた『公共性』の概念では不十分である」とし、「『ＦＭわぃわぃ』は、大震災を経験するまでの長い期間、『あたかも存在しないように』生きることを余儀なくされた人びとの声を届け、『他者が私に対して現れる空間』、つまり現在的な『公共性』をつくりだす装置＝メディアとして機能している」と評価する。つまり「ＦＭわぃわぃ」の活動の中に、グローバル化した現代社会において「公共性」を切り開く可能性を見出しているのである。

松浦・川島（2010）もまた「公共圏」の形成に、コミュニティ・メディアの意義を見出している。「社会において周縁化されてきた女性や労働者、さらには多様なマイノリティの人々が、親密圏にまつわる小さな話題も含めて幅広いテーマを討議し、外部へと発信していく多元的な場のネットワークこそが、現代社会において重要である。小さなメディアとしてのコミュニティメディアは、こうした対抗的・多元的・連鎖的な公共圏のニーズに応えるものなのだ」とする。

以上の点は、先住民族メディアについてもいえることである。したがって、先住民族がメディアを所有するということは、先住民族内部にとっても、先住民族と外部社会との関係においても、また、社会全体にとっての「公共性」「公共圏」を形成するという点においても、重要な意義をもつことがわかる。

第３項　問題意識と課題

さて、本章が対象とするのは、北欧の先住民族の１つ、サーミのメディアに関してである。サーミは、「世界の先住民族の復権運動を牽引する立場にある」とされる（葛野 2007：214）。先住民族メディアに関しても、同様な点が指摘でき、放送･通信メディア、活字メディアのいずれにおいても、生活に根付いたメディアを育ててきている。本研究チームは、2012年度から４か年の計画で、北欧のサーミと日本のアイヌ民族がおかれている状況に関する比較研究に着手している。本章の対象に即していえば、先進的といわれる地域の事例に学ぶことをとおして、アイヌ民族を取り巻く現在のメディア環境を相対化し、現在の課題と今後の可能性をさぐることを目指している。

サーミのメディアに関する調査は、2012年度がスウェーデン、2013年度がノルウェー、2014年度がフィンランドを予定しており、本稿は主にスウェーデンのサーミ・メディアに焦点を当てた分析を進める。その意味で、本稿は中間的なまとめという位置づけにある。

サーミの居住地は、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの北部からロシアのコラ（Kola）半島にかけて広く分布しており、そこに１つのサーミ共同体を構築しようとする動きもみられる。「ベネディクト・アンダーソンが1983年に用いた“想像の共同体”の概念を借りると、サーミ共同体は､サーミ国家とサーミの国民としてのアイデンティティが社会的に構築されたという意味で“想像”されており、この過程でメディアは中心的な役割を果たしてきた」(Pietikäinen 2008a：199）と評価されている。しかし、現実には、サーミの居住地は、それぞれ国境で分断されており、サーミ･メディアはそれぞれが属する国のメディア政策や制度の枠内で活動せざるをえない状況にある。後述するように、そのことがサーミとしてのメディアのあり方に大きな影響を及ぼしていることもまた事実である。各国のサーミ・メディアは、国境を越えたサーミ共同体レベルの動きと密接に連動しながら、相対的に独立して活動を展開している、あるいは展開せざるをえない状況にある。したがって、本稿では、他国のサーミ･メディアとの関連に留意しつつ、スウェーデン国内におけるサーミ・メディアの実態について明らかにすることを試みる。

以下では、まず、サーミの社会においてどのようなメディアが、どの程度利用されているかについてみていく。そのうえで､それぞれのメディアの特性について考察し､スウェーデンにおけるサーミ・メディアの現状と課題について指摘する。

第２節　サーミのメディア接触状況

それでは、サーミはサーミ・メディアをどの程度利用しているのであろうか。われわれは今年度のスウェーデン調査で、一般住民、サーミ学校の保護者、サーミ工芸学校の学生に対してインタビュー調査と配布調査を実施した。その際、サーミ・メディアへの接触状況について尋ねてみた。調査に協力して頂いたのは、一般住民と保護者で21人、学生15人の計36人である。数は少ないが、回答結果から一定の傾向はつかめると考える。

まず、対象者の基本属性をみると（表８－１）、男女別には女性が28人、男性が７人と、圧倒的に女性が多くなっている。とくに、サーミ工芸学校は、もともと女子学生が圧倒的に多いため、対象者は15人中14人が女性である。年齢的には、一般住民・保護者は30～50代が中心、学生は20代が中心である。表８－２は、調査対象者が使用可能なサーミ語を尋ねた結果である。「話せない」という人が３人いる一方で、３つのサーミ語が使用可能であると答えた人が１人、２つが６人となっ

ている。残り25人は１つのサーミ語の使用者である。また、これをサーミ語別の人数で集計すると（表８－３）、調査対象者の61.1％が北サーミ語の使用が可能であることがわかる。次いで36.1％がルレ・サーミ語、11.1％が南サーミ語が使用可能となっている。10あるといわれるサーミ語の方言のなかでも当地域は北サーミ語を使用するサーミが多く、そのことはのちにみるサーミ・メディアの使用言語にも影響を与えている。

表８－１　対象者の基本属性

	一般住民保護者	学生	計
女	14	14	28
男	6	1	7
NA	1	0	1
60代	1	0	1
50代	6	0	6
40代	6	0	6
30代	5	0	5
20代	1	13	14
10代	1	2	3
NA	1	0	1
計	21	15	36

資料：実態調査より作成

表８－２　調査対象者の使用可能なサーミ語　　人、％

使用可能なサーミ語	人数	比率
北サーミ語	15	41.7
ルレサーミ語	7	19.4
北サーミ＋ルレサーミ語	5	13.9
北サーミ＋ルレサーミ語＋piteサーミ語	1	2.8
北サーミ語＋南サーミ語	1	2.8
南サーミ語	3	8.3
話せない	3	8.3
NA	1	2.8
計	36	100.0

資料：表８－１に同じ

表８－３　サーミ語別使用者数　　人、％

サーミ語	人数	比率
北サーミ語	22	61.1
ルレサーミ語	13	36.1
南サーミ語	4	11.1
piteサーミ語	1	2.8
話せない	3	8.3

資料：表８－１に同じ

表８－４は、調査対象者が利用するサーミ・メディアについて示したものである。質問文は、「次のサーミ関係のメディアや番組のうち比較的よく利用するものに○をつけて下さい（ＭＡ）」である。全体的には、テレビを比較的よく利用する人が88.6％、雑誌が65.7％、ラジオが60.0％で、これが３大メディアとなっている。雑誌へのアクセスが思いのほか高いという結果となった。その一方、新聞やウェブラジオは約３割に留まっている。一般住民・保護者と学生を比較すると、学生はラジオ（73.3％）、雑誌（73.3％）、新聞（40.0％）において、一般住民・保護者を大きく上回る利用率を示した。これはサーミ工芸学校で寮生活を送っていることや学校で新聞や雑誌が閲覧できる環境にあることが影響していると思われる。そうした環境の影響もあり、学生のサーミ・メディアの接触率は高い。表８－５は、新聞、雑誌の活字メディアとラジオ、テレビの放送メディアに分けて、どちらをおもに利用しているのかをみたものである。学生の場合は、「活字メディアと放送メディアの両方」というものが85.7％と圧倒的に多い。一般住民・保護者では、両方という人が52.4％に減じ、放送のみ33.3％、活字のみ14.3％と、やや放送メディアにシフトする傾向がみられる。

表８－４　属性別サーミメディアの利用状況

	実　数(人)			比　率（%）		
	一般住民保護者	学生	計	一般住民保護者	学生	計
ラジオ（ＳＲ、Ｐ２チェンネル）	10	11	21	50.0	73.3	60.0
ウェブラジオ（Sámpi）	8	3	11	40.0	20.0	31.4
テレビ（サーミニュース）	18	13	31	90.0	86.7	88.6
文字放送	1	0	1	5.0	0.0	2.9
新聞	4	6	10	20.0	40.0	28.6
雑誌	12	11	23	60.0	73.3	65.7
回答者数	20	15	35			

資料：表８－１に同じ

表８－５　メディア種類別の利用状況

	実　数(人)			比　率（%）		
	一般住民保護者	学生	計	一般住民保護者	学生	計
活字のみ	3	0	3	14.3	0.0	8.6
放送のみ	7	2	9	33.3	14.3	25.7
両方	11	12	23	52.4	85.7	65.7
計	21	14	35	100.0	100.0	100.0

資料：表８－１に同じ

表８－６　雑誌の種類別利用状況

	実　数(人)			比　率（%）		
	一般住民保護者	学生	計	一般住民保護者	学生	計
Samefolket	10	2	12	83.3	16.7	100.0
Nuorat	2	10	12	16.7	83.3	100.0
Š	1	3	4	25.0	75.0	100.0
該当者計	11	10	21	52.4	47.6	100.0

資料：表８－１に同じ

ところで雑誌に関しては、具体的な雑誌名も聞いている。その結果から一般住民・保護者と学生とでは利用している雑誌が異なっていることがわかる。一般住民・保護者は歴史のあるSamefolket（サーミの人々）を、学生はNuorat（若者）やノルウェーで発行されている若者向け雑誌「Š」を利用している（表８－６）。

以上みてくると、サーミ・メディアはサーミの人々によってかなり利用され、生活の中に定着していることがうかがわれる。回答者のなかに「まったく利用していない」という人は皆無で、その濃淡はあるにしても、全員がなんらかのかたちでサーミ・メディアに接触していることがわかる。

以下、放送・通信メディア、活字メディアの順に、その具体的なありようについてみていくことにする。

第３節　放送・通信メディアの形成と現状

第１項　歴史

放送メディアについては、ラジオ放送が先行し、それから半世紀遅れてテレビ放送がスタートしている。まず、簡単に歴史を振り返っておこう。

サーミラジオの歴史は1952年に始まる。この時、最初に放送を始めた人たちはスウェーデン人で、放送はスウェーデン語で行われた。トナカイ放牧に関するニュース、スウェーデン政府の決定、礼

拝に関するもののほか、サーミ語講座などが放送された。

サーミによるサーミ語の番組が始まるのは1965年である。“Samiságat”という週刊ニュース番組を、サーミの居住地全体に向けて放送した。また、サーミ語の娯楽番組“Illubådda”の放送も始まり、サーミのアーティストをラジオで紹介するなど内容の幅も広がった。1974年には“Miehtasámi”という番組がスウェーデン、ノルウェー、フィンランドで放送されるようになった。翌1975年には、キルナに新しいスタジオが設立されている。

1993年、当時キルナとイェリヴァーレにあった２つのオフィスが、スウェーデン公共ラジオ放送（ＳＲ）の元で統合され、キルナに本部が置かれる。サーミラジオはＳＲのＰ２チャンネル（後述）の中で、独自の番組枠をもつようになる。1995年に、サーミラジオは、いったん、ＳＲのノルボッテン支局の１部門に位置づけられたが、2000年には、再びＳＲの独立した番組制作部門に戻り、ストックホルムのＳＲ本部のもとに置かれることになる。組織上、サーミラジオの地位が上昇したことを意味する。

2001年８月、ＳＶＴ（スウェーデン公共テレビ放送）においてサーミ語のニュース番組がスタートする。最初はノルウェーのＮＲＫ（ノルウェー公共放送）とＳＶＴで取り組み、翌2002年１月にフィンランドのＹＬＥ（フィンランド公共放送）がこれに加わり、北欧３国が協力して取り組むようになる。

2002年にサーミラジオは50周年を迎える。2006年１月16日から北欧３国共通の国際的ウェブラジオSR Sámpiがスタートする。また、2009年には、もともとキルナの中心部の別々の建物内にあったＳＲとＳＶＴがともにキルナ郊外に移転し（写真１）、同じ建物内の同じフロアで仕事をするようになり、サーミラジオとサーミテレビの協力関係が強化される。また、2010年には、北欧諸国間の協力体制の強化もはかられている[4)]。

以上のように、スウェーデンのサーミ・メディアでは、ラジオもテレビも公共放送のなかに番組枠をもつかたちで発展してきたところに特徴がある。これは北欧の他の２つの国においても同様で、オルタナティブ・メディアとして独立しているのではなく、主流メディアのなかに居場所を確保しているのである。伊藤・八幡（2004：3）は、主流メディアにおいて先住民族言語による番組が放送されるケースについても、広義の先住民族メディアと理解するという見解を示しているが、これはまさにそうした事例の１つといえる。こうした場合、どの程度、先住民族自身が運営の主体となりえているのかが重要となる。以下ではその点に留意して運営状況をみていく。

第２項　ラジオ放送の運営状況

(1) 放送時間枠

サーミラジオは公共ラジオ放送ＳＲの１つの番組制作部門として存在している。日本でいえば、ＮＨＫの番組制作部門の１つということである。ＳＲは、全国ネットワークで４つのチャンネル（Ｐ１～Ｐ４）をもつほか、25のローカルチャンネルで放送を行っている[5)]。

表８－７にみるように、全国ネットワークの４つのチャンネルのうちＰ２は、「クラッシック音楽、移民・少数者向け」の内容を放送している。表８－８は2012年7月10日火曜日のＰ２チャンネルのタイムテーブルを示したものである。音楽番組を挟みながら、フィンランド語、ペルシャ語、ロマ語、クルド語、アラビア語など、様々な言語の放送が行われていることがわかる。サーミラジオ部

門が担当するのは、平日（月～金）が6:35～8:00、15:00～16:00の２時間25分、日曜日が15:00～16:00の１時間となっている。土曜日は放送がなく、１週間の総放送時間数は13時間05分である[6)]。また、北欧３国共通の国際的ウェブラジオSR Sámpiが2006年１月16日からスタートしており、こちらは24時間放送している[7)]。

表８－７　４つの全国放送チャンネルの内容

Ｐ１：ニュース、トーク
Ｐ２：クラッシック音楽、移民・少数者向け
Ｐ３：若者向け総合編成
Ｐ４：全国ネット１と25のローカルサービス

資料：ＮＨＫ放送文化研究所『ＮＨＫデータブック世界の放送　2012』

表８－８　Ｐ２チェンネルタイムテーブル（2012年７月10日：火曜日）

00.00	Notturno　夜の音楽　　司会：カタリーナ　アーロンソン
06.00	Huomenta Ruotsi フィンランド語番組
06.30	Sisu uutiset　フィンランド語ニュース
06.35	ニュース　　サーミに関するニュース　スウェーデン語放送
06.40	Iditboddu　サーミ語番組
06.50	Aurora　音楽番組　　司会：カーリン　シェルマン
09.00	P2 リクエスト　　司会：リーサ　ティリング
10.00	Ekoニュース
10.03	クラシックの午前　　司会：ボーエル　アドレル
12.00	P2ドキュメンタリー
13.00	ペルシャ語　放送
13.30	ロマ語　放送
14.00	クルド語　放送
14.30	アラビア語　放送
15.00	英語　放送
15.30	ニュース　　サーミに関するニュース　スウェーデン語放送
15.35	Rádiosiida　ＮＲＫサーミラジオとの共同放送
16.00	Sisu uutiset　フィンランド語ニュース
16.10	Studio Sisu フィンランド語の番組
16.50	Roketti　フィンランド語の番組
17.00	P2 クラシック音楽
18.00	Ekoニュース
18.04	P2 クラシック音楽
19.19	音楽ニュース　　司会：アンドリーアス　リンダール
19.30	P2 ジャズ　生演奏
21.30	私のアメリカンソングブック　　ゲスト：リーナ　ニーバリ
22.30	Kalejdoskop（万華鏡）　夜の音楽　　司会：ウルバン　ヨーランソン

出典：サーミラジオのＨＰ（http://sverigesradio.se/sameradion/）より作成

(2) 使用言語と放送内容

サーミラジオは、北サーミ語、ルレ・サーミ語、南サーミ語、スウェーデン語で放送されている。6:35～7:05まではニュースの時間である。6:35から５分間スウェーデン語によるニュースが行われ、ついでサーミ語のニュースが続く。ただし、10を数えるというサーミ語の方言がすべて平等に使用されているわけではない。北サーミ語のニュースは毎朝6:40～6:50に行われるが、ルレ・サーミ語と南サーミ語のニュースは、6:50～7:00に週２回ずつとなっている。この３つ以外のサーミ語の放送は行われていない。キルナ市やヨックモック市があるノールボッテン県は北サーミ語を使うサーミが多いため、このように北サーミ語の放送が中心となっている。7:05～8:00は、音楽のほか、天気、新聞の見出し紹介が行われるリスナー参加型の番組である。毎週火曜日の7:05～7:30は子ども向けの番組が放送される。また、15:00～16:00はノルウェーとの共同放送となっている。ラジオではノルウェーとの協力関係が強く、ＮＲＫニュースも１日２回（7:00～7:05、15:00～

15:05）放送されている。

われわれのインタビューに対応してくれた編集責任者のK.M.氏によると、番組づくりで重視していることは、現在のサーミの生活のあらゆる面を番組に反映させることであるという。トナカイ業だけでなく、炭鉱で働くサーミもいる。そういうサーミの多様性を番組に反映させることを心掛けている。それと同時に、世界中の少数民族の状況に関する情報についてもチェックし、必要に応じて番組に取り入れている。

(3) 組織体制

サーミラジオを支える常勤のスタッフは14人である。９人が男性、５人が女性で、そのうち11人がサーミ、３人がスウェーデン人男性という構成である。最年長は64歳、最年少は26歳で、30～50歳代が中心である。ほとんどの人がジャーナリストの教育を受けている。プロデューサーは２人。14人のうち３人は技術者（機材）で、残り11人が番組づくりを担当する。基本的には、番組を制作した人が放送で話すというかたちになっている。常勤者14人以外に、３人のレポーターが特別の番組を作るために採用されている。２人が女性（51歳､19歳）､1人が男性（22歳）である。レポーターのほとんどはサーミである。このように主流メディアの枠内にあるとはいえ、番組の制作にあたる人の約８割は先住民族の人たちで担われている。

(4) リスナー

サーミラジオのＨＰ（www.sr.se/sameradion）によれば、１日平均26,000人から32,000人のリスナーがいるという。ウェブラジオSR Sámpiのリスナー数は、８月と11月で3,800人を数える。

写真１　３つあるラジオスタジオの１つ

写真２　サーミラジオとサーミテレビがはいっているSVT の建物（キルナ郊外）

第３項　テレビ放送の運営状況

(1) 放送時間枠と放送内容

一方、2001年８月にＳＶＴでサーミ語のテレビ番組放送がスタートする。当初は、ノルウェーのＮＲＫと共同で、翌2002年にフィンランドのＹＬＥが加わり、北欧３国で取り組むようになる[8)]。

いずれも各国の公共放送の時間枠を使っての放送である。それまでテレビでサーミ語放送をすることは各国のサーミの悲願であり、長い間ずっと要求してきた結果、ここに至ってようやく実現したものであるという。

放送時間は15分間である。当初は10分間でスタートし、2003年１月から15分に延長された。スウェーデンでは、現在は平日の17時から17時15分の15分間、サーミ語のニュース（Oddasat）を流している。ＮＲＫ、ＳＶＴ、ＹＬＥが共同制作しており、サーミの人々が住んでいる地域に関するトピックスや、世界の少数民族に関するニュースを放送している。テレビ番組の場合は、ほとんどが北サーミ語で行われる。他のニュース番組と違っているのは、吹き替えを使っている点で、サーミ語以外で行われているインタビューはサーミ語への吹き替えが行われ、これにスウェーデン語の字幕をつけるという方法がとられている。

この他、2007年９月からサーミの子どもたちのための子ども番組（Unna Junná）が始まっている。土曜日の16時45分から17時までの15分間で、毎週あるというわけではなく、１年間に30週間のみ放送されている。番組は、サーミ語の歌や詩、サーミの人々が住む地域の動物や自然に関する話などから構成されており、やはりスウェーデン語の字幕がつけられている。この番組は、スウェーデン及びフィンランドのＳＶＴとＹＬＥ、ＳＶＴ-Sámpi、ＹＬＥSaamen Radioによって共同制作されている。初めはノルウェーも加わっていたが、その後抜けている。

(2) 組織体制

ＳＶＴには、サーミ語のテレビ番組制作のための専門のスタッフが８人いる。編集長１人、レポーター３人、ビデオとレポート両方できる人２人、カメラマン兼編集２人の計８人である。６人が女性、２人が男性、平均年齢36歳。すべてサーミである。この８人で15分のニュースを作っている。このようにテレビ番組の制作現場も先住民族自身によって担われていることがわかる。

また、同じフロアで仕事をするサーミテレビとサーミラジオのスタッフの協力関係は密で、毎朝ミーティングを行いニュース番組の制作における協力体制を築いている。

第４項　財源

それではサーミ放送を支えている財源はどうなっているだろうか。スウェーデンの公共放送は、テレビ所有者が支払い義務を負うテレビ受信料で成り立っている。公共放送は、スポーツイベントのスポンサーシップ以外は広告放送が禁止されており、受信料がほとんど唯一の収入源である。受信料は１世帯単位で徴収される。日本とは異なり、テレビの台数に関係なく、単身赴任などで世帯が分かれていても１世帯として扱われる。2011年の1世帯当たり受信料は年間2,076kr（約２万4,000円）である。こうして支払われた受信料は公共放送に関わる６つの組織で配分される。６つの組織とは、ＳＶＴ、ＳＲ、ＵＲ（教育番組制作会社）、ＲＩＫＡＢ（受信料徴収会社）、スウェーデン放送管理会社、スウェーデン放送委員会で、このうちＳＶＴに総受信料の60％が割り当てられている（ＮＨＫ放送文化研究所 2012：154）。ＳＲもその１つとしてテレビ受信料の配分を受けて運営されている。したがって、サーミテレビもサーミラジオも公共放送の一部門であることから、財政は受信料によって成り立っており、自ら営業活動をする必要はない。つまりオルタナティブ・メディアを維持していく上でもっとも大きな問題といわれる財政問題を、サーミ放送の場合はクリアしてい

ることになる。もちろんこうした環境は外から与えられたものというわけではない。K.M.氏は、「私たちも提案をして、戦って、財源を得てきている」と答えており、一方におけるこうした働きかけがあって現在があるということも忘れてはならない。

第５項　規制監督機関（スウェーデン・ラジオ・テレビ・オーソリティ）

以上みてくると、番組の制作面でも財政面でも、サーミラジオやテレビは先住民族が主体となって取り組むことができる条件の下にあることがわかる。それをふまえた上で、あえて、「ラジオやテレビにおける番組内容について、外部から指導されるということはあるのか」尋ねてみた。その回答は、「スウェーデンでは言論の自由が守られており、事前の検閲のようなものは一切ない。放送後に反論があったりはするが、事前のものはない」というものであった。放送後というのは、番組内容に問題があると思えば、視聴者が規制監督機関に訴えることができる制度のことを指している。スウェーデンには、「スウェーデン・ラジオ・テレビ・オーソリティ」という独立した規制監督機関があり、テレビ、ラジオ、新聞、映画などをモニターする役割を担っている（ＮＨＫ放送文化研究所 2012：154）。視聴者から異議申し立てがくると、規制監督機関は、法律に則って問題があったかどうかを調べ、諮問にかけ、必要があればメディアに指導を行う。このルートで、番組内容に対する反論がくることはあるという。きわめて妥当な仕組みであることはいうまでもない。

このように財政基盤は保障され、番組編成権も有しているスウェーデンの先住民族の放送メディアは、理想的な環境にあるように思える。だが、たとえば、放送時間の問題となるとなかなか思うようにはいかないという現実があることは指摘しておく必要がある。とくに、テレビのニュース番組の放送時間が15分に限定されていることに対する不満は大きい。「たった15分」という表現を何回も耳にした。時間枠の延長を要望はしているが実現は難しく、そうした点には不自由さを感じている。主流メディアの内部にあることによって、時間枠という点では思うようにはならない現実があることがわかる[9)]。

第６項　他の国の放送局との協力関係

さて、第１節で指摘したように、国境をまたいで居住空間が広がるサーミ民族にとって、関係する国家間の協力関係はきわめて重要である。実際に、サーミラジオは、1970年代半ばから北欧３国での協力関係をスタートさせ、その後、ラジオ番組やテレビ番組を共同で制作してきている。また、ロシアのコラ半島のサーミとの協力関係も生まれており、サーミラジオのＨＰによれば、2010年に諸国間の協力体制をさらに強化したことが記されている。2010年に強化した点をK.M.氏に尋ねたところ、「以前より会議などで会う機会が多くなった」という返事であった。トップの人たちは、年間に10回くらい会議をもって、番組の内容を決める。その下のチーフたちも、年に４回くらい会って会議をする。スタッフも、北欧全体から年に１回は集まって、顔が見えるようにしている。番組の大きな構成などはトップが決め、具体的な内容についてはチーフが話し合うという。

「協力関係を強化することの最大の目的は、みんなが協力していくことは大事なんだという考えを強めることである。どの国の人も、協力関係を生き生きと保ち、それを継続していくためには、お互いを尊重する必要がある。民主主義的な関与の仕方の問題である。うまくできたからといってその場で立ち止まることはできなくて、つねに前向きに推し進めていかなければならない。そのた

めには会議の回数を重ねる必要がある」という説明が加えられた。

一方、これまでの分析をふまえると、必ずしも北欧３国の歩調がぴったりと合っているというわけではないようにみえる。ラジオ番組は、スウェーデンとノルウェーの関係が深く、両国で共同放送を行っているが、フィンランドは参加していない。テレビのニュース番組は北欧３国で協力しているが、子ども番組はスウェーデンとフィンランドの２国の協力であり、ノルウェーは途中から参加を取り止めている。

こうした事態の背景には、次のような事情が存在していると考えられる。１つは、資金力の問題である。ノルウェーは資金力があるため、人も雇え、他国よりも番組を作ることができる環境にある。他の２国は、その点で共同歩調をとりにくい面がある。さらに、もう１つ、「報道姿勢の違い」というより根本的な問題があるという。Pietikäinenは、フィンランドのユヴァスキュラ大学の言語学科ディスコース研究の教授であるが、彼女の調査研究のなかで、「異なる国に分かれているが、われわれは１つの大きな国家である。私は、共同のテレビニュースは、１つの国としてわれわれを結びつけると信じている」が、「ニュース制作の方法、ジャーナリズムの実践、資金力の違いは、３つの国の編集局が一緒に仕事をすることをかなり難しくしている。サーミ・メディアが属している各国公共放送会社は、ニュースのイデオロギーが異なっており、これらの違いはサーミのジャーナリズム実践に徐々に行き渡っている」というフィンランドのサーミ・メディア関係者の声を紹介している。とくに、ニュース番組は、ノルウェーの編集責任者が最終的に取捨選択をする権限をもっているため、フィンランドの編集者が望むようなニュースが作れないという問題も指摘する（Pietikäinen 2008a, 2008b）。つまり、それぞれが属する国家の制度内で活動するということが、国家間の協力を難しくしている面があることがわかる。

こうした現状があることを知った上で、先のK.M.氏の発言をもう一度読み直すと、そこで語られている「民主主義的な関与の仕方の問題」という指摘の重要性が理解できる。国境によって分断されたサーミ共同体が、サーミ・メディアを用いて「想像の共同体」を築くことはそれほど容易なことではなく、試行錯誤を繰り返しながら粘り強く取り組んでいる。2010年に諸国間の協力体制をさらに強化したことの背景には、こうした事情があったことをうかがい知ることができる。

第４節　活字メディアの形成と現状

それでは活字メディアに目を転じよう。スウェーデンにおけるサーミの活字メディアの中心は雑誌である。第２節の調査結果によれば、雑誌を読んでいるという人が65.7%、新聞を読んでいるという人は28.6%である。新聞に関しては、現在スウェーデン国内で発行されているサーミの新聞はなく[10]、ノルウェーで発行されている新聞（Ávvirなど）が購読されている。Ávvirとは「思いやり」という意味で、北サーミ語で週３日発行されている。雑誌は、一般人向けの“Samefolket（サーミの人々）”と若者向けの“Nuorat（若者）”や「Š」があげられていた。このうち「Š」はやはりノルウェーで発行されている雑誌である。ここでは、スウェーデンで発行されているSamefolketとNuoratの２つを取り上げてみていくことにする。

第１項　雑誌Samefolket

Samefolketは、1918年から定期的に発行されてきたサーミ雑誌で、先住民族によって発行されて

いる世界最古の雑誌の１つである。雑誌の前身である「Lapparnes egen tidning（ラップ人独自の新聞）」は1904年に発行されたが、５回出ただけで1905年に廃止されている。その後1918年、トルケル・トーマソンが、資金繰りに成功し、「Samefolkets egen tidning（サーミ人独自の新聞）」という名称で新聞の発行を再開した。幾度か経済的困難に直面したがなんとか生き延び、1960年にはSamefolketに名称が変更され今日に至っている。

Samefolketは、スウェーデン・サーミ全国協議会（Svenska Samernas Riksforbund）とサーミ文化の振興を目的とする全国組織「Same Atnam」を主体に形成された財団が発行する雑誌である。おもにサーミの人々が住む地域における文化的及び政治的出来事を掲載しているが、時にはその他の少数民族の生活や文化、抱えている問題についても記述している。おもにスウェーデン語で記述されているが、サーミ語で書かれた文章も含まれている。月１回発行される月刊誌で、現在は１冊50kr（約600円）、年間購読の場合は年額420krである。広告掲載料のほか、国の文化評議会からも資金援助を得ている。ちなみにスウェーデンでは、2006年から、サーミ語が25％以上用いられている雑誌や新聞は文化評議会から援助を受けられるようになっている。

編集は独立して行われており、運営は、スウェーデン・サーミ全国協議会から選出された３人、サーミ文化の振興を目的とする全国組織から選出された２人の計５人によって行われている。委員会によって正式の編集者が指名される。1997年には、Samefolketのウェッブ版が立ち上げられている。記事は、紙面上のものと必ずしも同じでなくてもよく、むしろ議論の場であり、サーミに関する情報を提供している[11)]。

なお、表８－９は、2012年11月１日発行のSamefolketの目次と使用言語を示したものである。総ページ数は、表紙、裏表紙を含めて44頁。この号では、トナカイ業と関連が深い鉱山開発の問題が特集として取り上げられており、それが19頁と半数近くを占めている。目次全体を眺めても、社会的な問題を掘り下げるような月刊誌であることがわかる。サーミ語が用いられているのは８頁で、全体の18.2％となっている。

表８－９　Samefolket の構成と使用言語

頁	内　　容	使用言語
1, 2	表紙、表紙裏	
3	目次	
4-6	ちょっといい話	スウェーデン語
7	時事ニュース（トピックス）	サーミ語
8-11	人を切る	スウェーデン語
12-13	歴史（将来に向けて）	サーミ語
14	グルメ情報	サーミ語
15	鉱山について	スウェーデン語
16-33	特集　鉱山関係記事	スウェーデン語
34-35	歌謡コンテスト	サーミ語
36	広告	
37	読者の声	スウェーデン語
38-40	広告	
41	スデークさん経歴	サーミ語
42	クロスワードパズル	サーミ語
43	生まれた、亡くなった、小さいニュース	スウェーデン語
44	裏表紙	

出典：Samefolket（2012年11月１日発行）

第２項　雑誌Nuorat

Nuoratは、北サーミ語で若者という意味で、サーミの若者向け雑誌である。Nuoratは政治的及び宗教的にどこにも属していない雑誌で、ヨックモックに拠点をもつ非営利団体・Nuoratによって出版されている。2006年ごろまでは、Sáminuorraというサーミの若者組織のメンバーを対象とする雑誌としてSáminuoratという名称で発行されていた。しかし、政治色がとても強かったため、そこから独立し、いまのかたちでNuoratが発行されるようになる。政治色や宗教色を薄めることで、より多くの若者に読んでもらうことを目指したのである。非営利団体の運営メンバーは５人。男３人、女２人。20代が中心で、１番上でも30歳と若者によって構成されている。サーミ工芸学校の学生の中にも運営メンバーとして関わっている者がいる。雑誌の編集者は運営委員会が雇うかたちになっている。

雑誌は、北サーミ語、ルレ・サーミ語、南サーミ語、スウェーデン語で書かれている。ファッション、音楽、グルメ、旅など若者向け情報のほか、評論、ルポ、サーミ伝承の活性化など幅広い内容が掲載されている。総ページ数は40頁ほどで、写真をふんだんに使い、全体的にカラフルで、若者好みの雑誌となっている。雑誌の写真には、自分たちの仲間がモデルとして多数登場している。運営委員の1人Ｈさんによると、「サーミの中で今何が起こっているかというのを、若いサーミの人に伝えるためにこの雑誌を作っている。サーミ語もできるだけ入れて、サーミ語を読めるチャンスを増やすようにしている。また、ただ楽しい記事だけではなくて、政治の話やいま社会で起こっている問題を取り上げて掘り下げたような記事も載せるようにしている」ということである。

発行は年４回、季刊誌である。発行部数は約4,000部、一冊50kr（約600円）、定期購読の場合は年４冊で150kr（約1,800円）とし、若者が定期購読しやすいような価格にしている。発行に関して、サーミ議会（Sametinget）と国の文化評議会から資金援助を受けている。Ｈさんによれば、資金さえあれば毎月発行したいが、今のところ財政的に難しいということである[12)]。

写真３　若者雑誌らしい表紙

写真４　記事もカラフル

以上のように、SamefolketとNuoratは、ともに先住民族メディアとしてサーミの視点で情報を送り続けていることがわかる。財政的には、購読料のほか、国からの援助金で成り立っている。もちろん、発行回数を増やしたいというNuoratの運営メンバーの声もあるが、それでも年４回、40頁程度の雑誌を発行することができるだけの財源が確保されている点は評価できる。

第５節　まとめ

以上、スウェーデンのサーミ・メディアの展開と現段階についてみてきた。放送・通信メディアは60年、活字メディアは100年近い歴史をもち、現在のサーミの生活の中にしっかりと根付いている様子がみてとれた。オルタナティブ・メディアが直面する最大の困難である財政的問題も、国やサーミ諸団体からの補助金や受信料の分配を受けることによって、相対的に安定した状況にあることがわかった。比較する対象である日本のアイヌ民族の現状を思い浮かべると、あまりに大きな違いに愕然とさせられる。しかし、そうした感想をもらすわれわれに対して、関係者は、「スウェーデンは進んでいるといわれるが、進んでいるスウェーデンでさえこの程度なんですよ」と述べており、サーミ・メディアに関わる人びとは現状に満足してはいなかった。そこで最後に、サーミ・メディアが直面している課題についてふれ本稿のまとめとする。

第１に、北欧のサーミ放送の特徴は、公共放送の番組制作の１部門として存在しているという点に関わっての課題である。これは、主流メディアとは独立して存在するオルタナティブ・メディアとしてではなく、主流メディアの枠内に居場所をもっているケースで、伊藤・八幡（2004）の言うところの「広義の先住民族メディア」と捉えることができる。このような場合、主流メディアのなかでいかに自立した立場を堅持しているかが重要になる。主流メディアの規制を強く受けているとすれば、オルタナティブ・メディアとしての役割は十分に果たすことはできない。サーミラジオやサーミテレビの場合、番組制作現場はおもにサーミの人々によって担われており、編成権も有している。また、財政的には視聴者が支払う受信料の配分を受けており、国家や企業には依存しない仕組みになっている。したがって、獲得している番組放送時間内においては、先住民族による先住民族のための放送が行われているとみてよいであろう。ただし、サーミ放送に関わる人々は現在の放送時間に決して満足しているわけではない。とくに、テレビのニュース番組は１日15分に限定されており、放送時間枠の拡大に対する要望は大きい。しかし現状では、実現することは困難であり、主流メディアの運営主体を納得させるには至っていない。このように放送時間全体をコントロールするような権限まではもちえていないというのが現状である。

第２に、使用言語に関する課題である。サーミが使用するサーミ語には10ほどの方言があり、なかにはお互いに理解不能なほど言語体系が異なるものもある。このような状況は、放送メディアや活字メディアに、どのサーミ語を使用言語として用いるかという選択をせまることになる。決してすべてのサーミ語が用いられているわけではない。やはりその地域のサーミの多くが使用しているサーミ語が優先されることになる。ノールボッテン県であれば、北サーミ語を使用する人が多いため北サーミ語を用いることが多くなる。他はルレ・サーミ語と南サーミ語が用いられる程度で、とくにテレビでは北サーミ語中心の傾向が強い。こうした現状については、面接調査のなかで、ルレ・サーミ語を使用言語とする工芸学校の男子学生から、「あまりテレビではルレ・サーミ語をやってくれないので、もうちょっと放送してもらえるとうれしい」といった意見が聞かれた。テレビ、ラジオ、雑誌は、いずれもこの３つのサーミ語とスウェーデン語を併用して制作されており、それ以外のサーミ語はほとんど使用されることはない。つまり、この３つのサーミ語以上に消滅の危機にある言語にとっては、これらのサーミ・メディアはその維持・存続に関する役割を十分に果たせてはいない。サーミ語内部の格差構造ともいえるような状況が存在しているのである。この点について、サーミ・メディアに関わる人々がどのように考えているのかについては、今後の調査で明らか

にしていきたい。

第３に、国境を越えた連携の重要性とその難しさである。サーミの居住地は、ノルウェーからロシアのコラ半島にかけて国境を越えて広がっている。そこに暮らすサーミの人々が１つの民族を構成しているというアイデンティティをもつためにも、また外部に対してその存在を知らしめる上でも、サーミ・メディアが果たしてきた役割は大きい。国境をまたいで同じ内容の放送を聞いたり、新聞や雑誌に目を通したりすることを通じて、情報を共有することは、国境によって分断されている人びとを結びつけ、ある共同行動に駆り立てるような役割も期待できる。サーミラジオもサーミテレビも、北欧３国では協力関係を模索しながら発展してきた経緯がある。ノルウェーで発行されている新聞や雑誌もスウェーデンで読まれていた。しかし、その一方で、各国のサーミ・メディアはその国のメディア政策や制度の枠内で活動せざるをえない上に、国ごとのメディア政策の違いや経済力の違いにより、必ずしも各国のサーミ・メディアが一枚岩的に協力関係を構築できているわけではない。テレビのニュース番組はかろうじて北欧３国で共同放送をしているが、ラジオ放送ではノルウェーとスウェーデン、テレビの子ども番組ではスウェーデンとフィンランドという２国間の協力にとどまっている。北欧３国の協力関係にあるテレビのニュース番組に関してさえ、先に指摘したような不協和音が聞こえてくる状況にある。

一方で、各国のメディア政策に依拠しているからこそ相対的に安定した運営を実現しえているのであるが、他方では、そのことが「想像の共同体」を構築することにとって足かせになっている面もあるということである。ある意味、矛盾を抱え込んでいるのである。とはいえ、そうした状況を乗り越え、なんとか足並みを揃えようという努力も行われているようである。その矛盾をできるだけ緩和するために、北欧３国は協力関係を強化し、話し合いの場を多くもち、解決の糸口を捜している現状がかいまみられた。

第４に、サーミ・メディアの情報発信が一部のプロフェッショナルなサーミに独占されていないかという問題がある。今回の調査では、たとえばコミュニティ・ラジオのようなより小さな媒体を通じて一般のサーミが情報発信に関わる事例には遭遇しなかった。むしろ公共放送のための立派な建物の中で、ジャーナリズム教育を受けたサーミの人たちが情報の送り手として働いており、その様子をみて送り手と受け手の間に距離があるのではないかという疑問が漠然と浮かんだ。しかし、その点について今回は十分な実証はできなかった。むしろ放送メディアよりも、雑誌編集、とくに若者向け雑誌であるNuoratの運営に関わっている若者のなかに、自分たちの思いを積極的に伝えていこうとする姿勢が見て取れ、参加型のメディアとして可能性が感じられた。サーミの若者たちは、サーミ内部で無意味な争いを続ける大人世代を批判的にみており、その障害を乗り越えようという志向性を有していた。政治色や宗教色を排し、新たに非営利団体として雑誌を発行し始めた若者たちの動きには今後とも注目していきたい。

注

１）全国市民メディア協議会のＨＰ（http://medifes.wordpress.com/、2013年１月３日最終閲覧）を参照のこと。

２）伊藤・八幡(2004）では、先住民族メディアを、「先住民族により、先住民族を主たる視聴者として運営されるマス・メディア（傍点筆者)」と定義している。本稿では、先住民族メディアを

マス・メディアに限定する立場にはたっていないため、ここでは単にメディアとした。

3）その１つにアイヌ語も含まれている。詳しくは、『調査と社会理論』研究報告書30の第５章参照のこと。

4）サーミラジオについては、サーミラジオのＨＰ（http://www.sr.se/sameradion,2012年７月11日最終閲覧）、サーミテレビについては、ＳＶＴのＨＰ（http://www.svt.se，2012年８月３日最終閲覧）を参考にしたほか、Solbakk（2006）、およびサーミラジオの編集責任者K.M.氏に対するインタビュー結果からまとめた。

5）この他に、６局のデジタルラジオ（ＤＢＡ方式）やインターネットのストリーミング、３Ｇ携帯電話サービスも行っている。

6）この他にＰ４のローカルチャンネルの１つイェムトランド局でも、週に２回（火曜日、木曜日）15分ずつ（18時10分～ 18時25分）サーミ語の放送が行われている。スウェーデン中西部に位置するイェムトランド県は南サーミ語を話すサーミが多いので、放送では南サーミ語が用いられている。ただし、ノールボッテン県では聞くことができないのでここでは割愛する。

7）サーミ議会のあるときは、その模様をWEBで１日中流している。

8）編集局は、それぞれスウェーデンはキルナ、ノルウェーはカラショーク、フィンランドはイナリに置かれている。

9）ノルウェーでは、こうした時間的制約を乗り越えるため、サーミ自身がコントロールできる放送局を設立することが検討されているという（Alia 2010： 134）。だが、現実的かどうかという問題もあり、いまのところ実現されていない。

これに対し、同じように多様な先住民族が居住するカナダでは、先住民族のために全国に向けて放送をしているアボリジナル・ピープルズ・テレビ・ネットワーク（ＡＰＴＮ）という放送局がマニトバ州のウィニペグを拠点に存在する。また、ウィニペグには、先住民族のためのラジオ放送局、ネイティブ・コミュニケーションズ・インクも開局しており、他にも全国に先住民族のためのラジオ局は数局存在している（市民とメディア調査団（カナダ）2004；川上 2006）。

10）サーミ議会における事務局員は、われわれのインタビューに答えて、個人的な意見と前置きした上で、「スウェーデンでも新聞がほしいという声は強い。しかし、実際に計算してみるとコストが非常にかかるため、新聞は紙媒体ではなくWeb上でやる方が現実的である。新聞を発行するなら、もっと子どものためのサーミ語の出版物やビデオ・DVDの制作にお金をかける方がいい」と語ってくれた。

11）以上、雑誌「Samefolket」については、SamefolketのHP（http://www.samefolket.se/, 2012年８月20日最終閲覧）、および Solbakk（2006）を参照した。

12）以上、雑誌「Nuorat」については、Nuorat のHP（http://www.nuorat.se/,2012年８月18日最終閲覧）、および編集にかかわる若者Ｈさんへのインタビューを参考にした。

参考文献

Alia, V., 2010, *The New Media Nation: Indigenous People and Global Communication*（Berghahn Books）.

Benedict, A., 1983, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*（London: Verso）. 白石さや・白石隆訳, 1997,『増補・想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行―』N

ＴＴ出版.
伊藤守，2010,「多文化社会におけるメディアと公共性」田中義久編『触発する社会学』法政大学出版会, 195-226.
伊藤直哉・八幡耕一，2004,「先住民族メディアの理論に向けた社会的機能についての考察—関連する国際機関の概観とともに—」『北海道大学大学院国際広報メディア研究科・言語文化紀要』第47号，1-26.
川上隆史，2006,「多文化主義カナダに根づく多様なメディア」津田正夫・平塚千尋編『新版 パブリックアクセスを学ぶ人のために』世界思想社，56-74.
葛野浩昭，2007,「ローカルからグローバルな資源へ、過去遡及かつ未来志向の資源へ——北欧の先住民族サーミ人による文化の管理と表現の試み」山下晋司編『資源化する文化』弘文堂, 209-36.
小玉美意子，1993,「マイノリティとメディア」香内三郎ほか編『メディアの現在形』新曜社, 241-72.
ＮＨＫ放送文化研究所編，2012,『ＮＨＫデータブック世界の放送　2012』NHK出版.
松浦さと子・川島隆，2010,『コミュニティメディアの未来』晃洋書房.
松浦さと子，2012,『英国コミュニティメディアの現在』書肆クラルテ.
市民とメディア調査団（カナダ），2004,『カナダの市民とメディア——多言語・多文化と共に』市民とメディア調査団（カナダ）.
Peterson, C., 2003, “Sámi Culture media”, *Scandinavian Studies*, Vol.75, No.2, 293-300.
Pietikäinen, S., 2008a, “To breathe two airs: empowering indigenous Sámi media”, in Wilson, P., and Stewart, M., eds., *Global Indigenous Media*（Duke university press), 197-213.
————, 2008b, “Broadcasting Indigenous Voices: Sami Minority Media Production”, *European Journal of Communication*, 23(23), 173-91.
白水繁彦，1996,『エスニックメディア』明石書店.
————，2004,『エスニックメディア研究』明石書店.
Solbakk, J. T. ed., 2006, *The Sámi People- A Handbook*（Davvi Girji OS).
八幡耕一，2005,「エスニック・メディア論における新しい視座——『先住民族メディア論』確立の意義とその社会的機能の考察——」情報文化学会『情報文化研究』第３巻，39-46.

（小内　純子）